

螢卷の物語論について

—その機構および位相—

武原弘

点を把握することからはじめたい。物語に即する立場から、本文の長い引用をも厭わずにすすめることとする。

五月雨の降り続くころ、玉鬘は物語に熱中して、六条院での無聊を慰めている。当時、物語は、婦女子の「つれづれ」を慰める「すさび」ものとして詠まれていた。蓬生巻にも、

はかなき古歌物語などやうのすさびごとにてこそ、つれづれを
紛らはし、かかる住まひをも慰むるわざなめれ。〔全集〕(2) —
三二〇頁。以下も同書による。)

とあり、他の諸巻にも同趣の叙述を多見することができる。玉鬘も例外ではない。

源氏は「笑ひ」ながら言う。

あなむつかし。女こそものうるさながら、人に欺かれむと生れ
たるものなれ。こころの中にまことはいと少なからむを、かつ
知る知る、かかろすずろごとに心を移し、はかられたまひて：
… (3) —二〇二〜二〇三頁)

「物語に虚偽が多いことを知りながら、それに熱中する女の気が知れない」〔全集〕(頭注)との意である。が、そう言いつつも、彼は

螢卷の物語論を拡大解釈して、かつて本居宣長は、「源氏物語の本意」もののはれ」説を提唱した（「源氏物語玉の小櫛」）。それは、従前行われていた仏教、儒教の勧善懲悪思想による源氏物語謬みを排しての、国文学本来の文献学的方法に拠る新しい源氏物語解釈として、画期的なものであった。が、現今においては、その論証上の飛躍がきびしく批判されてきている。^(注1)そして、その批判の前提をなす厳密精確な本文解釈、結論として導き出された「物語虚構即真実」論こそ、螢卷の物語論の要諦を正確に解析し得たものと広く認められているので、もはや何らの贅言も不要とすべきであろうが、玉鬘物語という「すぐれて小説的な世界像」^(注2)を形成する文脈のなかの物語虚構論であるだけに、それはあくまでもアイロニカルな構造を有するとされておき、その機構および位相も、必ずしも自明的なものではない。

諸先学に導かれつつ、こうした課題について小考を施したい。立論の便宜上、まず、螢卷で玉鬘を相手にして源氏が語る物語論の要

螢卷の物語論について —その機構および位相—

物語の価値を認めないわけでもない。

このいつはりどもの中に、げにさもあらむとあはれを見せ、つきづきしうつづけたる、はかなしごとと知りながら、いたづらに心動き、(中略)いとあるまじきことかなと見る見る、(中略)ふとをかききふし、あらはなるなどもあるべし。(二〇三頁)

「いつはりども」「はかなしごと」「あるまじきこと」すなわち「虚偽」を書く物語ではあるが、「かた心づく」「ふとをかききふし」があつて、退屈しぬぎにはなるだろうとも言う。かなり揶揄の口調となつてゐる。物語は

それごとをよくし馴れたる口つきよりぞ言ひ出だすらむとおぼゆ(同)

ので、享受者は結局、欺かれてしまふ態たらくだと源氏は続ける。

ここまで、物語における虚偽性を衝いて、源氏の論理は一貫してゐるかに読める。「いつはり」「それごと」に相對する「まこと」の少なさが、論の要点である。阿部秋生氏によると、「いつはり」と「それごと」は、厳密には語義を異にするもので、前者は言葉の上での単純なうそ、後者は事実によつて證明できない(事実^{まこと}に反する)うそである、とされる。ここで源氏が、「いつはり」と「それごと」と、異なる表現によつて物語の虚偽を説明している点が注意されるが、この問題については後述に譲ることにする。

さて、一旦は物語を貶したものの、それは源氏の真意ではないらしい。物語を「たいたいとまことの事とこそ思うたまへられけれ」(三)―(二〇四頁)と肯定する玉鬘に同じで、源氏は反転し、今度は

極端な物語称揚論者となるのである。

神代より世にある事を記しおきけるななり。日本紀などはただかたそぼぞかし。これらにこそ道々しく詳しきことはあらめ。

(三)―(二〇四頁)

またも「笑ひ」ながら語つてゐるので、冗談めかした揶揄口調は変わつてゐないといふ知れるものの、これこそが彼の本音であることは、以下に続く懇切丁寧な物語談義に再説されるところからも証せられると考へるべきであらう。

その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節ぶしを、心に籠めがたくて、言ひおきはじめたるなり。よきさまに言ふとては、よき事のかぎり選り出でて、人に従はむとては、またあしきさまのめづらしき事をとり集めたる、みなかたがたにつけたるこの世の外の事ならずかし。人の朝廷のさへ作りやうかはる。同じやまとの国の事なれば、昔今の変るべし、深きこと浅きことのけぢめこそあらめ、ひたぶるにそれごとと言ひはてむも、事の心違ひてなむありける。(同)

源氏はまず、物語は神代以来の「世にある事」すなわち後文における「世に経る人のありさま」「この世の外の事なら」ざる事―世にあって生活している人間の現実―を書いてゐること、それは歴史書(男性の手によつて成つた正史)にも書いてある事がらでもあるが、物語の方が詳しく、また、人間が「生きていく上で手本になる事」^(註)までも書いてゐる、と言う。さらに、その書き方は、確かに現実の

人間の生活の中の事実を書くのであるが、ありのままの事実としてではなく、特に興味深い事がただけを選択し、しかもそれらを甚だしく誇張して書くこと、その作風は国や時代によって深淺の差異を生じることがあっても、全体として虚偽（「そらごと」）と考へてはならないこと、など論及している。つまり、玉鬘の詞に合わせれば、「まこと」が書かれていると論じたい源氏なのである。これを要するに、物語は虚構によって人間の眞実を書いて伝えるもの、との結論である。

源氏はさらに、仏教の教法にいう「方便」論を援用して、物語の本質としての虚構即眞実論を補強し、完結するのであるが、いま瀧江文世氏の論述を借りて、源氏の物語論の要旨をまとめてみる。「史の『実』に対する物語の『虚』的構造が虚偽のものではなくて、個別的委細を通じてその奥に虚構的眞実を志す為の典理化」——それが物語の本質および方法だということになる。

このような源氏の物語観は、諸先学が一致して認めるように、作者紫式部自身の抱く物語観と解してよく、「物語」を「歴史」と對抗させ、むしろ上位に置こうとする、当時きわめて漸新かつ革新的な文学観であったと評せられるのである。やや先んじて、「蜻蛉日記」の作者が

世の中におほかる古物語のはしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあり、……（一二五頁）

と嘆いて、わが身の上の事実を記録、公表するを潔しとしたのに比し、事実を超越する虚構によって、それにまさる人間の眞実を追求しようとした紫式部の文学意識、人間認識の深遠さが対照的なので

螢巻の物語論について——その機構および位相——

ある。しかも、歴史や物語についての当時の社会通念とも遠い経緯をもつ式部の物語観は、痛烈にして切実であればあるほど、作中人物の冗談めかした会話という偽装文体の裡に潜行せしめられる結果となつてはいるものの、かつて中村真一郎氏の評論に道破されたごとく、それは「全く近代的な小説観と符号する」驚くべき普遍性を具有するものであった。

以上、螢巻の物語論を祖述しながら、その要旨を再確認した。これを踏まえて、この物語論の展開を支えている機構について、次節に若干の考察を加える。

二

この物語論が、源氏と玉鬘の対話形式によって展開される点が、帚木巻における雨夜の品定め（注5）の女性論の場合と近似していることが、諸家によって指摘されている。論の構造が、いずれも三周説法の形式を踏まえていること、論談の時期がともに五月雨の降り止まぬころであること、さらには叙述の細部にまで類似表現が見られるので、両巻および両論の関連について示唆に富んだ考察がなされているのである。

ただ、螢巻の物語論では、場面設定において、論者が源氏、玉鬘が聞き手となつている点が、雨夜の品定めとはちがつていて、注意される。物語に熱中している玉鬘を相手に、日常物語に親しむことの少い源氏が論議を展べ、これを称揚するのは、不当とはいわれないまでも、適任とはいえないのではないか。源氏の会話中に断定表現が少く、「記しおきけるななり」とか、「あらめ」などの推量また

は仮定表現が頻出するのも、そのためであろう。もとより、源氏物語の女性人物は、総じて慎重深く、多弁を忌む傾向にあるから、この場面で玉鬘を能弁な論者に仕立てる発想は作者にあったはずもない。雨夜の品定めは、男性同志の議論であって、むしろ特別のケースと考えてもよく、薄雲巻の春秋優劣論、少女巻の教育論、玉鬘巻の歌論、胡蝶巻の恋文論など、論者は源氏とするのがこの物語での常態なのであるから、ここでも不自然さはないと見ることもできよう。が、こと物語論に関する限り、事情を異にしなければならぬ源氏の立場もあつたはずで、その意味においても、ここでの彼の物語談義はアイロニカルなのである。

物語場面における源氏と玉鬘の状況——物語に対する両者の関わり方の相違、置かれている倫理的環境に逆らつて深まる愛情問題などを考慮において、ここでの物語論の深層機構を追求したい。

田舎育ちの玉鬘にとつて、六条院を目にする物語はめずらしい。「つきなからぬ若人あまた」の指導援助を得て、彼女は「明け暮れ書き読み、営みたまふ」(二〇二頁)のであるが、その「髪を乱るるも知らずで書きたまふ」(二〇三頁)熱中ぶりを見てからかうところから源氏の物語論がはじまつていくことについては、前節でも触れた。

ところで、右の短い描写に見られる玉鬘の物語享受の態度は、「つれづれ」を慰める「すぎび」事にはちがいないとして、侍女ぐるみで書写作業に及ぶ、かなりの大事となつていゝものと想像される。それはおそらく、当時の貴族女性一般の物語享受の実態を写したものであるが、彼女たちにとつて物語は単なる慰みもの以上のもので

あつたとも考えられる。貴族子女の教育に有用だつたからである。

作中にも、明石の女御は「さやうのことをもよしありてなしたまひて、姫君の御方に奉りたまふ」(3—二〇二頁)と叙せられ、これより後の場面で、紫の上も「姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨てたく思し」(3—二〇六頁)で、それを手にしていろいろ吟味している。当の源氏自身も、物語の教育効果を認め、その故にこそ教育上適当なものを厳選して姫君に与えるよう、紫の上に注意を促している(3—二〇八頁)。要するに、物語は子女の教科書として大切なものであつた。ただし、ここでの玉鬘の場合、彼女はすでに成人して、物語による教育を受ける年令は過ぎているので、大人としての趣味と実益とを兼ねての物語書写なのであろう。胡蝶巻にも、「昔物語を見たまふにも、やうやう人のありさま、世の中のあるやうを見知りたまへば」(3—一七五頁)と叙せられている。これは、西の対の女房ぐるみの冊子づくり(清書本づくり)といつてよいもので、おそらくは養母花散里も認めての営為であつたろう。

当時、文芸を重んじる知識階級の女性の間では、かな日記が書かれ、物語の筆写や改作が盛んであつた。稻賀敬二氏によると、寛和三年(九八七)には、大斎院の物語司で女房たちの総力をあけての新版「任吉物語」が制作されており、のち、それに対抗して紫式部(紫式部)による新作源氏物語第一部が清書、公表されたと考察されている。

また、「紫式部日記」中にも、彰子中宮の指揮のもと、同僚の女房たちとの共同作業で物語(源氏物語であろう)の冊子づくりに日夜励む式部の生活のひとつまが記録されている(寛弘五年十一月)。

このような背景を考えて、慰み種(なぐさ)としても、教養撰取源としても、

欠くことのできない「物語」を読みかつ書写することが、玉鬘にとって切実な関心事であったことが理解されるし、それは六条院に住む女性の一人としてふさわしい営みであった。源氏は「あなむつかし」と揶揄してはいるが、本心としてはそれを容認し、奨励しているのであって、続く物語称揚論がそのことを示している。

つぎに、玉鬘の物語享受の質的側面に注目してみよう。彼女は「ま、『住吉物語』を耽読しているらしい。」

さまざまにめづらかなる人のよなどを、まことにやいつはりにや、言ひ集めたる中にも、わがありさまのやうなるはなかりけりと見たまふ。住吉の姫君の……（以下略）（③—二〇二頁）

彼女は、作中人物の中に自分と同じ境遇の人物を見出し、わが身のこれまでの異常な運命を重ね合わせることで慰みを得、作中世界に陶醉している。こうした物語の享受態度は、後の『更級日記』の作者が源氏物語を読むときにそうであったように、作中世界と現実とを混同し、作中人物と自己との一体感を求める読み方と言えるもので、若い女性読者には通例のものであったろう。玉鬘が、「まことにやいつはりにや」との、いくぶん醒めた眼で読んでいる点に注意すべきではあるが、それも「言葉の次元での実と虚。ここでは物語を文面どおりにはか理解しない低さをいう」（『全集』頭注）のが、その実態なのである。「こなたかなた」の「御方々」についても、事態は同様であったと考えられる。源氏が、「女こそものうるさからず、人に欺かれむと生れたるものなれ」（前掲）と、一般化して皮肉を言っているで、それがわかる。その皮肉は、女性のそうした物語の読みの質を批判したものである。

蜚語の物語論について — その機構および位相 —

しかしながら、彼女たちのそうした読み方が、読み手の側の問題としてあるのではなく、すぐれて物語そのもの—その本質や機能そのもの—に因由するのであることを、源氏は熟知しているらしい。「かかる世の古事ならでは」以下の彼の物語虚構論は、文脈においては、物語の本質論展開であると同時に、玉鬘の物語享受の態度を貶したことで彼女の反発を招きかねなかつた言辞への源氏自らの釈明—玉鬘の反発解消のためのアフタケアーとして、物語そのものに責任の所在を追求しようとした、論理の修訂発言であったとも考えられる。案じていたとおり、彼女は「いつはりに馴れたる人や、さまざまにも酌みはべらむ。（中略）」と皮肉で応酬、「硯を押しやりたまへば」（③—二〇四頁）と、あからさまに反発的態度を示すので、源氏は狼狽の態で、さらに「骨なくも聞えおとしてけるかな」（同）と、前言撤回を余儀なくされ、「日本紀などはただかたそぼろかし。……」（前掲）と、冗談めかした誇張によって自己貶辱を計ることになる。そして、あらためて「その人の上とて……」（前掲）と、物語虚構即真実論を展開しなおすことによつて、物語の「まこと」を強弁してやまない玉鬘の態度を是認肯定し、説得に成功したと見ることが出来る。

ただし、ここで源氏が玉鬘に迎合し、おもねるに急で、ために彼自身の真意までも歪曲改変しているかと思えるならば、それは重大な誤解である。源氏の物語論は、玉鬘の次元の低い物語享受の態度を一旦は否定揶揄しながらも、それを包摂する形で、さらに深長にして高次元の物語虚構論へと止揚されていったと見ることが出来るからである。

前述のごとく、玉鬘は「まことにやいつはり」にや」と半信半疑ながら、わが身になぞらえて作中人物を追っている。対して語る源氏が、「さてもこのいつはり」と言っているのは、ほかならぬ玉鬘の意識の中にある「いつはり」を指し示した表現であり、彼の敷衍に従って言いなおすと、それは「げにさもあらむとあはれを見せ、つきつきしうつづけたる、はかなしごと」（前掲）である。が、注意したいのは、源氏がさらに続けて言う「またいとあるまじきことかなと見る見る、おどろおどろしくとりなしける……」（前掲）の部分が、玉鬘の物語の「いつはり」を離れて、それ以上の巨大な虚偽、すなわち「そらごと」に論及したものである点である。つまり、彼は新たに「そらごと」論をもち出すことによって、一挙に物語本質論の段階へ入っていくのである。そのことによって、彼は「まことにやいつはりにや」レベルの読みに甘んじていた玉鬘への批判を、巧妙なやり方で中絶することができなのである。「さしもあらじや」（二〇三頁）の「さ」が、前文の「そらごと」を承けていて、「いつはり」の部分を含まない点に注意したい。それをしも、「いつはり馴れたる人や……」との詞で応酬する玉鬘は、執拗というほかはない。この文脈を正確に辿るならば、つぎの「その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ……」（前掲）以下は、当然「そらごと」論の範疇において解釈されなくてはならず、厳密に「いつはり」論を除外しなくてはならない。つまり、物語が「世に経る人のありさま」を書いて作中人物を造型するとき、「よきもあしきも」（善人でも悪人でも）、「よき事のかぎりを選り出でて……あしきさまのめづらしき事をとり集め」（完全無欠の善人と

か悪の権化とか）極端に誇張して書くものであり、それこそがまさしく「そらごと」（非現実的、荒唐無稽）なのである。なぜなら、そのような人間はこの世には存在しないからである。現実の人間の姿とは、善悪両面を一体にかかえ込む、あるいは靈肉葛藤する、矛盾にみちた存在なのである。一方的に善なる、あるいは一方的に悪なる人間を書いている物語は、虚像による虚構世界にすぎない。が、究極において、それは人間の真実を書く。それは、ちょうど仏教における「方便」に似たもので、「御法」を説くに「方便」を以てし、「方等經」で「菩提」と「煩惱」とが「一つ旨にありて」（大系本では「あたりて」、虚にして実、実にして虚なるものであるように、物語における善人と悪人との関係も表裏一体となって、人間の真実を表象するものである、と源氏は言っている。源氏がこのように物語の真価を認め、これを称揚するとき、物語に熱中する玉鬘もまた源氏に容認され、賞賛されたことになり、かくして二人の信愛関係はいっそう深まるという結果が得られたのである。

このような物語虚構即真実論が、きわめて卓越した文学論であることは既述したとおりなのであるが、同時にまた、それが作者の間観の表白となっていることも確実である。人間存在の不確かさ、その矛盾の真相を凝視する作者は、源氏物語の中で、従来の古物語中には見られない新しい型の人物を造型し、新しい物語文学の創造にたち向っていたと評することができよう。そうした作者の意図は、物語第一の諸巻において、かなりの程度の実現をみたと言おうべく、私見によれば、たとえば紫の上とか明石の御方などの女性人物の造型に顕現しているように思われるのであるが、作者の深い人間追求

はなおこれにあき足らず、物語がさらに第二部へと続けられることになったのであろう。玉鬘物語は、作者のそのような人間観の深化過程の中で形成され、同時に第二部の悲劇世界を準備するものだったのではあるまいか。

ともあれ、螢巻における物語論の論理展開を支えている場面的要因——換言して物語論の機構——は、徹視的には、かくのごとくである。次節で私は、巨視的な立場から、これを玉鬘物語の世界構造との関連において考察してみたいと思う。

三

玉鬘の住む六条院は、太政大臣光源氏の榮耀を証しするクみやびの殿堂々と言うべきものである。そこには、春夏秋冬の情趣美が集約され、紫の上をはじめとする源氏の妻妾たちの、閑雅にして調和的な、豊かな趣味的生活が明け暮れに続行されている。それはまさしく「生ける仏の御国」(3—137頁)であった。

このような六条院に、おもて向き源氏の実娘として玉鬘を迎え入れられた。彼女の奇しき僥倖といえるのであるが、ここで彼女は思わぬ苦惱と遭遇することになる。いく人も貴公子たちの求婚騒ぎはさておけるとして、養父である源氏からの懸想には困惑しはてるのである。「思はずに、心づきなき御心のありさまを、うとましよう思ひはてたまふにも、身ぞ心愛かりける」(3—181頁)玉鬘なのである。苦惱といえば、源氏自身もまた同様であった。世間の知る現立場において、父の娘に対する懸想は認められるものではない。が、血族関係にない当事者間で、養父と養女の恋愛はタブーではない。

螢巻の物語論について — その機構および位相 —

そして、そのことがいつそう両人の苦惱を大きくしている所以でもある。このような状況のなかで、螢巻の物語が冗談めかした逆説と誇張を伴う源氏の口調を通して語られる様相については、前節に触れたとおりである。

ところで、容貌風姿において「いとめやすく」(3—124頁)、人柄において「深き御心もちな……気色いと労あり、なつかしき」(3—166頁)玉鬘が世間の評判になるころ、物語は、これまでも何かにつけて源氏に対抗して止まなかった内大臣を再登場させる。彼の長女弘徽殿女御は源氏の養女秋好中宮に先を越され、次女雲居雁を東宮に内入させようと目論めば、源氏の長男夕霧との恋仲という許しがたい不始末によって阻まれる。再度の敗北によって、彼はますます源氏への反発を強め、いま、玉鬘への対抗駒とすべきわが新たな娘を捜しはじめ、尋ね出して引き取ったのが落胤近江の君であった。が、この娘のあまりの無教養、無作法な態度は内大臣一家の者を閉口させ、いまや世間の笑いや者となっている(常夏巻)。委細については省略に従うとして、ここで考えたいのは、人物造型として見られる玉鬘と近江の君とのあまりにも際だった対照の意味である。近江の君の劣った人格を極端にカルカチアライズすることによって、物語の作者はヒロイン玉鬘の理想性を引き立て、強調したかったのであろう。同時に、この二人の娘の人格の優劣格差は、そのまま源氏と内大臣とのそれでもあることがすでに明瞭なのであり、言い得べくんばそれは、両父親の娘に施す教育観、薰陶力の相違なのである。

源氏の息子夕霧に対する厳しい教育については、すでに少女巻初

頭部で詳描されているが、玉鬘巻から行幸巻前後にかけて、明石の姫君や玉鬘の教育に関わる源氏の言動が随所に描写されている。明石の姫君に和歌の髓脳を学ばせたいと言う紫の上に対し、源氏はすべて女は、たてて好めること設けてしみぬるは、さまよからぬことなり。(中略)ただ心の筋を、漂はしからずもてしづめおきて、なだらかならむのみなむ、めやすかるべかりける。

(3)―一三三頁)

と、柔軟な関わり方を奨励している。また、絵物語による姫君の教育については、良書を厳選して与えるよう紫の上に注意を促す源氏であったことはすでに触れた。彼の教育方針は、

よろづの事に通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、たどたどしくおほめく事もあらじと、ぬるらかにこそ掟てたまふなれ。(3)―二三一頁)

と、中庸を尊び、調和を愛するもので、内大臣が娘の個性に従った教育を強調するのは、趣きを異にしている。

よろづの事、もてなしがらにこそ、なだらかなるものなめれ。

(3)―二四七頁)

との所信を抱く源氏に対して、内大臣の性格は

何ごとにつけても際々しう、すこしもかたはなるさまのことを思しおぼすなどものしたまふ御心さま(3)―二八一頁)

なので、両者の人柄の差異ははなはだしく、それは子女の教育のあり方を含む生活態度の万般に反映するものであった。そして、両者の対抗劇において、源氏の人格の理想性はますます顕著に賞揚され、性急で直情径行型といえる内大臣の人物像の矮小化が進み、そこに

玉鬘の素姓にからんだ処遇問題がクローズアップされてくるというのが、玉鬘物語の基本構造であると言えよう。そして、そうした状況のなかで、屈折し、低迷し、あるいは微妙に深化する源氏と玉鬘の交渉がたどる愛と苦悩の情念世界を追求することが、この物語における作者の主題なのである。

ひるがえって、このような玉鬘物語の世界像とその文脈のなかに置かれている蜚語論の位相を見究めようとするとき、私は要点として、つぎの二点を再確認したのである。

その一は、すでに見てきたごとく、源氏が玉鬘を相手に物語論を説いたのは、彼女の年令に相応する後期女子教育の一環としてであったこと。源氏はすでに、貴公子たちが玉鬘に寄せる懸想文を通して求婚者たちの人物批評を語り聞かせ、あるいは昔物語を讀ませていたので、玉鬘も「やうやう人のありさま、世の中のあるやうを見知り」(前掲)はじめている。蜚語論は、そうした源氏の玉鬘教育の仕上げともいうべき段階のものなのである。そのような教育によって培われる彼女の柔和にして豊かな人間性は、物語など顧る余裕さえ失って性急に行儀作法の見習いを強いる内大臣の近江の君教育のなりゆきと比較されて、物語に顕著な対照を見せている。物語論は、そうした文脈の中にあつた。

その二は、この物語論が、玉鬘物語の世界にあつて、源氏の理想性を保証し称揚するものとして機能していること。婦女子の慰みものか、家庭教育材料にしかすぎない物語について、公的にはこれを扱うことのなかつた源氏がかくも深い造型を示し、かつ称揚するといふそのことが、女性の趣味生活のくまぐまにまで及ぶ彼の教養の

豊かき、抱合力の大きさを示現するものとして、々みやびの殿堂、六条院の主幸者にふさわしいのである。物語についてののみならず、和歌、音楽、書道などの諸芸百般に彼は精通し、四季の推移に即応して営まれる女性たちの閑雅な生活と趣味的行事のいっさいを宰領し、充足し得る能力と人格とを具備していたのであつて、その意味において、彼はまさしく、理想の「色々好み」であつた。柳町時敏氏によると、螢巻の物語論に限らず、源氏が作中世界で「論者」になる場面においては、一様に彼の絶対性、理想性が強調されているとする。氏が、例として少女巻の教育論、薄雲巻から少女巻にかけての春秋論の場面をとりあげて考察し、「源氏の『論』は、彼の物語世界における理想的絶対者としての存在たることが証され、確認されるべく展開されて」⁽¹⁰⁾「そこに、物語世界の人物を領略・支配・統御することによって、同時に物語の世界そのものをも掌中に収めた『論者』としての光源氏の実相を讀んで」⁽¹⁰⁾いるのは、物語論の場面についてみても、有効な卓説である。

論の内容そのものが、物語の真髓に触れ得て説得力をもつものであることは言うまでもない。物語を正史以上のものとして高く位置づけ、その虚構によって人間の真実を書くものと説く源氏に対し、玉鬘は敬意と驚嘆とを惜しむことなく、これに傾聴していたに相違ないのである。

以上の二つの要点を統合することで、螢巻の物語論についての私の機構論、位相論の結論となしたい。ここでの物語論は、上述したごとき意味において、物語世界像に有機的に、密接不可分に融合し、またそれを支える重要な支盤ともなっているのである。

螢巻の物語論について — その機構および位相 —

このように考察をすすめてきて、残されたいまひとつの問題点に私は留意しおかなければならない。

前述のとおり、螢巻の物語論は、善と悪とが表裏し一体をなすところに人間の実相をみる作者の深遠な人間観を基根として構築、展開されたものであつた。光源氏こそが、そうした作者の人間観の具象化にほかならないことを指摘した宣長の説を踏まえたくうで、吉岡曠氏はさらに考察を深め、作者がそのような人間観を内在させた物語論を、なぜ玉鬘十帖中の螢巻に書いたのか、ここでの物語論執筆の作者の動機を追究している。氏によれば、「玉鬘物語は、読む者をして光源氏の人格にある重大な欠陥があることを思わしめる」内容なので、光源氏を「悪者扱い」する作者に対して読者の非難があつた、あるいはあると予想されたので、そうした非難に答える、あるいはあらかじめ答えておくことが、物語論執筆の直接の動機であつた、とされる。論旨において、小稿で試みてきた私見とは正反對であるが、物語論の位相を考察するに示唆深い高論なのである。いまの私には反論の用意も力量もないのであるが、立場と趣旨を明確にする心算として、卑見を述べて小稿のまとめとしたい。

確かに、玉鬘物語における源氏の心理・言動は、単純に理想的と評されるものではない。なかならず、養女玉鬘への彼の懸想は、不可避的に、父娘間の不倫の罅りを引きずるもので、厄介である。玉鬘を極度に困惑させ、苦惱させ、源氏自身にも苦しい自制を要求するこの罅は、六条院の奥深い密室の中で、ながい時間にわたって低迷し、屈折し、閉塞せざるを得ない。同時的にそれは、内界に抑えてもなお妄動せんとする自らの情念のしたたかさに気づいた源氏

が、動揺し、震憾し、懊惱する精神の営みに匹敵するものでもあった。

しかしながら、源氏はけっして惑乱する人物ではなかった。物語本文は、密室で玉鬘の髪を愛撫する源氏を描きつつも、「いといたくも乱れたまはず」(31—206頁)と叙している。六条院の極度の秩序と調和を宰領する光源氏に対して、ここでの惑乱は許されなかったであろう。秋山虔氏の論述を借り言えば、源氏は「自身の玉鬘への恋の処理において、もっともきびしく自己の行為を規制し、価値規範の確立と維持にみずから仕え^(注12)」ているのである。源氏と玉鬘の交渉は、彼女の処遇問題を中心に錯綜する周囲の諸人物との人間関係のなかで、なお曲折の展開をたどるが、その過程において継起する諸事件、諸問題の転末は、すべて源氏の緻密な計測と卓越した裁量によって領導されているのである。そこでの恋や政治に臨んで源氏が行使する演出や策略を、人格上の「欠陥」と見るか、鍊達者の「妙技」と見るかが問題なのではあるが、いずれにしても、源氏は依然として六条院世界の自然と人為を支配し、君臨する絶対者であり続けていることは認められよう。そして、そのような六条院世界と光源氏像とは、この物語の作者を含む当時の貴族女性が憧れる理想の男性像に近かったのではあるまいか。

それにしても、六条院およびそこに住む光源氏とその恋人たちは、あくまでも物語の「そらごと」の世界のものである。現実の社会とそこに生きている人間の真実の姿は、それほどに善でも美でもなく、また理想的なものでもなく、もっと悪や醜にまみれて、矛盾にみちた存在なのであることを、作者は深く認識していた。玉鬘物

語における源氏と玉鬘の恋は、そうしたひとつの人間の真実を体现するものではあったが、作者によって必ずしも徹底させられずに低迷している。この恋物語においてわずかに試みられた人間の内面世界の追究・情念世界に深くたち入ることによって赤裸に見えてくる人間存在の根源的矛盾の真相を凝視しようと、作者があらためて執筆しはじめたのが、源氏物語第二部の物語なのである。このように考えてきて、再度、螢巻の物語論にたち返ってみれば、虚構即真実の物語論は、狭く玉鬘十帖の物語世界内にとどまるものではなく、それを受け継いで新たに構想されつつあった第二部の世界までも、その射程範囲に含むものだったと私は考えたいのである。

注1 阿部秋生氏「螢の巻の物語論」(『東京大学教養学部人文科学科紀要』第二十四輯、昭36・3)、淵江文也氏「螢」(『源氏物語講座』第三巻、有精堂、昭46・7)

注2 秋山虔氏「玉鬘をめぐる」(『源氏物語の世界』東京大学出版会刊所収、昭39・12)

注3 注1の阿部氏の論文による。

注4 吉岡曠氏「螢巻の物語論」(『文学』昭57・11)に、「道々し」の解釈として示されたのによる。従来「三史五経」に關わりのある語彙とされ、「政道に役立つ」などの訳語が当てられていたが、私も吉岡説に従う。

注5 注1の淵江氏の論文による。

注6 中村真一郎氏「王朝の文学」(新潮文庫、昭33・4) 四十五頁。

注7 注1の阿部氏の論文のほか、藤井貞和氏「雨夜のしな定め

から螢の巻の物語論へ」(『共立女子短期大学紀要』一

八、昭49・12)、同氏「物語論」(『講座源氏物語の世界』

第五集、有斐閣、昭56・8)ほか。

注8 稻敬賀二氏「源氏の作者紫式部」(新典社、昭57・11)

注9 藤井貞和氏「タブーと結婚」(『国語と国文学』昭53・10)

では、「母と子と犯せる罪」(『大被祝詞』)にふれるタブ

ーとされる。源氏と六条御息所の娘斎宮女御(のちの秋好

中宮)との情交不成立に同じい。私見では、源氏も玉鬘

も、現状での父娘関係のままでは結婚できないとして、

玉鬘の素姓の公表後ならば結婚可能と考えている本文叙述

を辿ることで、作品形象の範囲内で、これをタブー視しな

かった。作者の意識を問題にするならば、藤井説が妥当な

のかもれない。

注10 柳町時敏氏「『論者』としての光源氏」(『むらさき』第一

七輯、昭55・7)

注11 注4の論文による。

注12 注2の論文による。